

市民が集まり、憩い、楽しめる緑豊かな場所にいたしましょう



森の中の高知駅



高知を愛する皆様へ（「お知らせ」令和4年2月号）

令和4年2月1日

1月15日、初仕事に7人が参集、菜の花が咲く駅南口「みんなの庭」（下の写真）で静かに土いじりをしました。はびこったヨシの根を取り除くのがちょっぴり面倒でしたが、きれいになった地面に新しい草花を植えられそうです。有志差し入れのきんつばをお土産に、皆さん笑顔で別れて行きました。また、後日別働隊が北口駐輪場の植栽を手入れしました。

2月の活動日は13日（日）09:00～10:30、3月も13日（日）の予定です。

○トピックス：

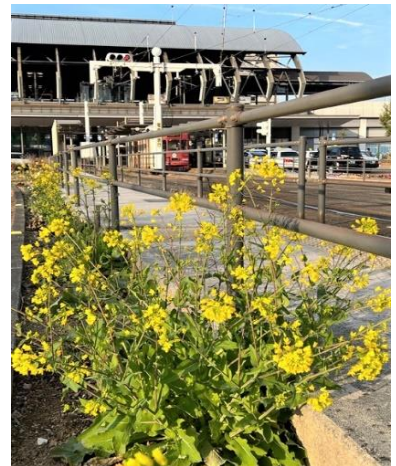
— 1月17日（月）、高知市みどり課を訪問、今年の活動計画（以下）をお伝えしました。

1. 「みんなの庭」の道路占用許可申請（3月中旬）
2. 高知市花いっぱい会に対する夏花苗材料等助成申請（4月1日）
3. 夏花の植え込み（6月）
4. 冬花苗材料等助成申請と植え込み（11月）
5. 「みんなの庭」の手入れ（8月を除く毎月）および、北口駐輪場まわり・南口3志士像前プランター・駐車場横植え込みなどの手入れ（随時）

6. 水遣り作業（通年）

南口「みんなの庭」の写真。菜の花が満開です。

7. 課題：●枯死した南口ヤシの木の跡地への植樹、
●同じく枯死した北口ハナモクレン2本の植え替え（ライオンズクラブ様が準備中）、
●大きく育ちすぎた？イロハモミジ（3志士像前プランター）への対処策検討、
●新規の植樹場所探し（地権者にご協力をお願いして）



駅前緑化活動はご賛同の方々のご厚志で維持されております。引き続き皆様のお力添え（花苗持ち寄り、勤労奉仕、ご寄付など）をお願い申し上げます。

♥森の中の高知駅♥ 幹事連絡先：〒780-0042 高知市洞ヶ島町1-11

中田昌志 携帯電話：090-8849-3651 E-mail：m.nakata1941@gmail.com

公文敏雄 携帯電話：090-7016-3743 E-mail：kumont2@yahoo.co.jp

ホームページ： <http://mori-kochi-eki.jimdo.com/>

取引銀行：四国銀行よさこい咲都支店「森の中の高知駅 ナカタマサシ 代表中田昌志」名義 普通 0709695

『木を植えた男』の物語

タイトルに惹かれて、フランスが生んだ大作家のひとりジャン・ジオノの短編小説『木を植えた男』（原作1953年）の邦訳を購入しました（＝右の写真、1989年あすなろ書房刊）。



小説のあらすじ

今から何十年も昔のことだが、第一次欧州大戦前の1913年夏、南仏のプロヴァンスを旅した十代の「私」は、山深く草木もまばらな荒野を、飲み水を求め彷徨った末、廃屋に住む初老の羊飼いに助けられた。妻子を失い孤独な男は、残る人生を何か世の役に立つことをして生きていこうと、毎日羊を追う傍ら、ドングリの実を荒地に植え続けているとのことだった。

むごたらしい戦争が終わった1918年、復員した「私」は再び村を訪ねていた。草木も無かった荒地がカシワやブナのみずみずしい森になり、小川まで流れている。植えても無事に育つのはわずか10分の1ほど。枯れても全滅しても空しさに耐え、老人はミツバチを飼って生計を立てながら独り黙々と木を植え続けていた。荒廃した世に神がつかわしたとしか思えない彼を、それから「私」は1年と置かず訪ねるようになる。

最後に老人を見たのは、第二次大戦が終わった1945年だった。荒地が生命の息吹を取り戻し、廃村に人々が戻って、笑いと活気に満ちていた。死ぬまで木を植え続けた男は、2年後、近くの養老院で89年の生涯をやすらかに閉じた。

死ぬまで続けたいシゴトが見つかった＝『木を植えた男を訪ねて—ふたりで行く南仏プロヴァンスの旅』（新井満／新井紀子著、1996年白泉社）より

3人の子育てが一段落し、介護に明け暮れた末に両親を天国に送って、これからどう生きてらよいか考え込む毎日だったというエッセイスト新井紀子さんは、『木を植えた男』と巡り会って主人公の気高い生き方に感動したひとりです。木を植えることの大切さと人生の幸福とは何かを教えられ、自身の役割（木を植え、緑の伝道者となること）を発見できたといいます。

そして、物語の舞台かつジオノのふるさとでもあるプロヴァンスを夫と共に訪ねたのはそれから数年後、ジオノ生誕100年の1995年のことでした。「思いつづけてきた人」のお墓に花をそなえ、生家、記念館、デュランス河などゆかりの場所を巡るうちに、作家の苛酷な半生（第一次大戦に応召して地獄のような戦地から心に傷を負ったまま奇跡的に生還、第二次大戦中は反戦運動が疎まれ讒言で2度も逮捕投獄された）を知ります。紀子さんは「ジオノは荒れ果てた人間の心に木を植えたかったのではないか」とも考えるようになりました。

夫妻のプロヴァンスの旅が活字になり、NHKテレビ「世界—わが心の旅」でも紹介されると、共感の輪が広がっていきました。当時の新潟県知事の提唱で誕生した、木を植え、緑を育てる県民運動「にいがた『緑』の百年物語」（2001年～）もそのひとつです。

芥川賞作家の新井満さん（75）が、昨年12月、愛妻紀子さんを遺して亡くなりました。いまごろは、<千の風になって>大空を吹きわたっていると彼女は信じています。

おわり